
俺が事故って起きたら紅の鉄槌少女になっていた【ネタ】

恋町小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が事故って起きたら紅の鉄槌少女になっていた【ネタ】

【Nコード】

N3668Y

【作者名】

恋町小路

【あらすじ】

事故って神様に協力することになって、起きたらようじょになっていた！

自らが魔法少女リリカルなのはの海鳴市の住人であった天道司が紅の鉄槌少女ヴィータになっていた。

原作ヴィータはどうなっているのか？

このお話は植物状態になった主人公が自分の体を取り戻そうと奮起するお話となっています。

いろいろ突っ込みどころ満載であることを明記しておきます。

0 - 1 事故ったら神様に会った

俺の名は天道司てんどうつかさという。

海鳴市に住むごく普通の大学生である。

大学は二流だが、俺はこの大学に通うために親元を離れ、一人ボロアパートを借りて、大学とバイト先を往復する毎日を送っている。いや、送っていた、と言うのが正しいか。

貧しいながらも充実した大学生活と言えただろう。

四年目に入り、そろそろ就職するか実家に帰って家業を手伝うかの選択を迫られていたが、どっちつかずに曖昧なままにしていた。

去年までの俺ならば、迷わずに実家に帰って、家の手伝いでもしながらのんびりと構えていたことだろう。

だがそうもいかないことになった。

好きな女ができたのだ。

彼女は海鳴の人だった。

実家に帰れば二度と会えないかもしれない

だから俺は就職を目標に企業のパンフなどを集めながら将来性のある就職先を吟味していた。

いくつかの目処はつけたものの、自信等はまったくなかった。

告白はまだしていない。

だが確信はあった。

彼女は俺のことを好いていてくれているのだと。

鳴り響く携帯のメール。

登録したばかりの着信音。

好きな人の曲。

待ち合わせをしている駅前の広場の植え込み。

時間は朝の九時。

大事な話がしたいから、俺は彼女を日曜日にデートに誘った。
彼女がそれをデートと思ってくれれば、それが俺の心を加速させる。

想いを告げる決心になる。

ドキドキしながら携帯のメールを開く。

『ゴメンなさい！ ちょっと遅れそうです。駅にいるから三分発の乗って行きます』

なあんだ、遅刻か、俺はドキドキさせたことをどんな風に言ってるのか、と頭の中でシミュレートするが、俺は女の子と気の利いた話をしたことがないのである。

『了解』

と短くそれだけを返信する。

待った？ いや全然待ってない、なんてありふれた台詞のカードさえ今日は切れそうもない。

まあいいか、と青い空を見上げる。

眩しい日差し、いい天気である。

俺は彼女が出てくるであろう改札口をじっと見る。

電車でここまで一五分、と時計を確認しながら植え込みのレンガに腰掛けて彼女を待つ。

後一四分……一三分……一分。

待ちきれない時間は切なさとなって過ぎていく。

改札口に行こう、と待ちきれなくなって、立ち上がった次の瞬間、世界を悲鳴にも似た叫びが切り裂いていた。

急ブレーキの音が鳴り響き、振り向くと銀色の光を見ていた。
信じられないような衝撃が全身を打って、俺の意識は一瞬にして
刈り取られていた。

「ヘイ、ユー？」

いきなり頭の中に響いた軽い挨拶に、俺は眩暈を覚えて頭を押さ
える。

「ここはどこだ？」

あたり一面が真っ白で、浮遊感による肉体の不安定さにパニック
に陥りそうになる。

落ち着け、なにがあった、なにが起こった？

「もしもし？」

「……あんた、誰だよ、おっさん」

俺に話しかける声だけの存在に、一応、声的にそうであるつとい
う呼びかけをする。

「ふ、わしか、わしはな神様よ」

「帰るわ……」

「ちよ、帰るってどこによ」

俺は思い切りため息をついて見せると、否定を込めて頭を振った。
今どきその手のジョークはないだろう……
こんなふわふわした空間でどう帰るのかなんてわかりもしないの
だが。

「ふう、夢か……」

「いや夢じゃないから、君ね、車に轢かれました。ちなみに植物人間確定」

衝撃的な事実だな。

白けた気分になる。

いくらなんでもそれはないわ。

「今日デートなんで、それはちょっと遠慮します」

「いやいや、確かに君事故ってるからデートはできないし、これ見
てみ」

と神様と名乗った男が言うと、空間に駅前が映し出される。

その一角に悲惨な事故現場が映し出されている。

多くの見物人が取り巻いて、それを眺めながらひそひそと囁きあ
っている。

救急車がやってくるのが見えて、現場を保存する警官数人とパト
ーカーの姿も見えた。

(ひき逃げだつてよ)

(誰だよ、轢かれたの。男?)

(若いのにーちゃんだな、すっげー血だな。こりゃ死んだか)

(ひき逃げした車、見たか?)

(見た見た、白のセダン。プレートも見たのいるかもな)

(そりゃよ、すぐ捕まるな。つまんねえの)

嘘、だろ……轢かれたのってもしかして俺なのか？

「轢かれたのはお前さんじゃよ、天道司」

「う、そ、だ……」

力のない声が口から漏れる。

「本当だしさ、諦めろよ」

「ふざけんなよ」

「おやおや……ありゃ、お前さんの彼女かね？」

その言葉に俺は映像を再び凝視していた。

彼女がいた。

人ごみをかき分け、徐々に前に、事故の跡地に足を踏み入れていた。

血まみれの現場だった。

や……めろ……よせ……俺はここにいるんだ……見るな、見るんじゃない。

伸ばしかけの肩まである彼女の髪が揺れて、その艶やかさはとてもきれいだっただ。

そのアーモンドのくつきりした瞳が揺らいで、警官達と救急車を呆然と見つめていた。

小さく可愛らしい彼女の口元が動いて呟いた。

テンドウ センパイ？

救急車にシートをかぶせられた俺の肉体が運び込まれていく。

タンカーから血痕がアスファルトに落ちて、新たな赤い染みを作り出す。

彼女になんて現実を見せてやがるんだ！

「ヤメロ、ヤメロ、ヤメテクレー!!!」

俺は目を閉じ、耳をふさぎ、ただ叫んでいた。
もう何も見たくなかった。

「事故の被害者の身元判明、海鳴市××在住……天道司、海鳴大学
所属四年つと。まだ若いのにな」

警官が現場を苦い顔をして振り返って帽子のつばを下ろす。
彼女は動かない、いや動けない。
今、私はなにを聞いたのだろう？
嘘、だってさっきメールして……

「先輩……どこ、ですか？ 隠れてるのかな……やだ、先輩、どこ
にいるの？」

ふらふらと歩みだして、警官に押し留められていた。

映像・フェードアウト

「現実と理解したかのう？ 天道司」

「ああ……わかったぜ、クソヤロウ」

振り返ると、頭の中の存在などではなく、神と名乗る、白髪に白
衣の着物姿の老人が立っていた。

「クソヤロウ、かね。神に失礼な男だ。こう見えても海鳴の神なん

「じゃぞ？」

「その神様が事故った俺に何の用だ？」

「早い話がのう、わしもここの神様やるの飽きていてな。少しばかり見込みがありそうなのがこないかと張っておったんよ」

「はいー？」

「神様やらんか？ はじめは見習いじゃがな」

「わけわかんねえよ！」

「お前さん、血筋に神性が混じっておるようだな。海鳴でも滅多にみん気質でな。死に掛けたのを幸い、魂を召喚したのよ。まあ神といてもピンからキリだがよ」

「まだ俺は死んでねえ、神様は他で探しな」

「お前さん、事故のせいで元の身体には戻れん。意識不明のまま朽ちるのを待つつもりか？ このまま放置なら持って数年で命は尽きよう」

「神様の力で戻せないのか？ 海鳴の神様なんだろう」

「ふふん、戻せなくもない」

「本当に！？ 戻せ、今すぐ戻しやがれ！」

俺は神様をとっ捕まえて締め上げていた。

気がつくと俺の身体は宙を舞って放り投げられていた。

叩きつけられると受身を取る姿勢になるが、ボフンっと真っ白な地面に弾んでいた。

「神に乱暴するでない。ご利益がなくなるぞい？ 話を訊く気になつたかの？」

目の前にごつい杖を突きつけられ、俺は肯いていた。

俺は合気道三段だが、まったくなす術もなく投げられるなんて、素人相手には考えられないくらいだ。

肯いたのは初めて沸いた恐れと本能の働きからだった。

「わしにはお前さんを元の身体に返す力はある、あるが、世上の穢れというものが神の力を妨げるのよ」

「穢れって？」

「邪念やよこしまなもの、穢れそのものでできた魔がそれにあたる。それが力を妨げるのだ。邪魔するのはお前さんに溜まり積もった悪しきものの穢れよ。覚えがないかの？ ごく最近、お前さんの身の回りでよからぬことや事故が起きなかつたかの？」

「えっと、何でだ、何でそんなことまで……」

身に覚えがあつた。

それは最近どころではなく、ずっと昔から俺の周りでは不思議なことが起こっていた。

誰にも話したことがないし、話せば気味が悪い子として見られたからだ。

「お前さんの神性がそれらを引きつけるのだ。今のお前さんの肉体は邪念をもった穢れで雁字搦めになった要石のようだ。わしが介入してなければ早晩にでも弱つたお前さんを取り込んでしまうことだろうよ」

「何でだ、何で神様は俺に構うんだ？」

「みすみす未来ある若者の将来を不意にするのは憚びなくてな。それにお前さんに海鳴の神を押し付けて、わしもそろそろ隠居したいのが本音よ。なんじゃ、嫌そうな顔をするな」

「ねーから、俺はごく真つ当に人間やりてーよ。故郷だつてあるしな」

「まあ、なる気があるうとなかろうと、お前さんが意識を取り戻すには穢れを祓わねばならん。それができるのは神性を持つ者自身の力が必要よ。穢れを祓えば祓うほど力は増していく。それをお前さんにやってもらおうと思ふんじや。お前さん自身の手で立って貰わ

ねばならん」

「……なるほどな、等価交換ってやつか。あんたが力を手に入れるために俺に働けと？」

「イグザクトリー、じゃ。お前さんが願う力の形をまとって現界してもらおうことになる」

「はいい？」

「今のお前さんは魂だけ、仮初の身体が必要になる。安心しろ、ベースは人間型になる。持つ力もお前さんに近い力を持ったものになるだろう。わしのここで溜め込んだ情報ソースを元に構成するから問題はない」

「も、問題？ あるだろ、絶対！」

「気にするな、多少の外見の違いはあるが、お前さんの神性に期待しようではないか。新たな因果の種をまいてアマツカミどもを慌てさせてやるわ」

「おっさん、話訊けつてばよ！！ って何か私怨っぽい！？」

俺の抗議は一切無視して、神のヤローが俺の額に杖を押し付けていた。

「後で指示はちゃんと出すから心配するな。現界したら海鳴神社まで来るのだぞ。さあ、行け！ 天道司。己が運命を切り開くがいい！！」

突如開いたブラックホールのような穴に司が吸い込まれて消えていく。

「ふう……行ったのう。思わぬ拾い物じゃった。事故が起きたのは無印の原作が始まるちょっと前じゃのう。介入するもよし、しなくともよし。なにせよよい暇つぶしじゃ。いったい誰になるのかのうっ？」

神様は好好爺とした顔つきで笑うのだった。
この神様、リリなのファンであった。

0 - 2 起きたら幼女だった……

薄暗い見慣れた天井だった。

当然だ、ここは俺のアパートの「寮山白」、天井の木目に沿った独特な染みがついている自分の部屋だった。

2Kのそれほど広くもない部屋には俺だけしか知らない収納スペースが多々あったりして、暮らしやすいようにコーディネートされている。

六畳の畳部屋の布団は万年布団で、実に寝慣れた寝心地となっていた。

人が来ると足の踏み場もないのだが、自分だけのルートを知っている俺には何の問題もないわけだが、さすがに女の子を部屋に入れたことはまだない。

その部屋でいつもどおり目覚めたんだが……

妙なことに気がつく。

寝ぼけて目を覚ますと何かがおかしかった。

素っ裸でいたのだ。

おかげでスースーして、寝返りを打ちながら毛布を引き寄せる。

その小さな手を見て、ようやくなにがおかしいのかに気がついた。その体に触れる。

ほっそりした、なだらかな曲線の肩だった。

つるぺただが男のものではない胸は成長段階をまだ迎えていない。

なんだこれは……

俺は混乱していた。

何が何だかわからない。

直接見るのが怖くて股間に手をやると、やはりついてるべきものがついていなかった。

これは夢か、夢であってくれ、と恐る恐る顔を上げて、その先にある鏡を眺める。

赤い長い髪を持つ幼い少女の顔が見つめ返してくる。

くつきり整った顔立ちに、大きな瞳、どう見ても日本人ではない赤い髪の色。

外見の年齢は小学生の中頃から高学年の間くらいだろうか、司の知識ではその程度の認識でしかない。

えーと、幼女が俺の部屋にいて、この幼女が俺、なのか？

鏡を見ると、俺の表情に合わせて、鏡の中の少女も表情を変える。完全に一致した動きだった。

布団を頭からかぶる。

現実逃避に眼を瞑っていた。

そして思い出す。

俺は事故に遭って、神様に会った。

あれは現実で、俺の肉体はどうなったのだろうか？

そもそも今のこの体はいったい誰なのか？

救急車で運ばれた、ということは俺の体は病院にあるはず。

そして植物状態にある。

不味い、非常に不味い。

元の体に戻るには神様に協力しなければ元に戻れないと提示されていた。

そのために手を貸すにしてもこの体で何ができるのか？

思考すると、途端に腹が減ってきた。

今は何時だろうか？

照明をつけるのは不味いと判断して、目覚まし時計を手繰り寄せ

る。

あれから三時間しか経っていないことが時刻から判断できた。

何か着る物は……

押入れを漁るが、この幼女体形に合う服などありそうもない。身長一七五の成人男性の服を着るには身長が足りなさ過ぎた。しかし素っ裸で出歩くのも問題がある。

とりあえず服は後回しにして、冷蔵庫を開いていた。

パンと牛乳しかねえ、とため息をつくが、ないよりは増した。ちっこいぶんだけ小食で済むかも知れねえ。

座り込んで、食パンを齧り牛乳で胃袋に流し込み、ようやく一息をつく。

押入れから短パンとTシャツを取り出して、サイズの差に愕然としながらベルトを締めていた。

ワンサイズどころの騒ぎではない。

短パンのほが膝下まで突き抜けている。

上着は革ジャンを選ぶ。

季節的にまだ必要だし、外見的なアンバランスさには眼を瞑るしかない。

靴は履けるものがなかった。

ブカブカを通り越してスカスカだがスニーカーを履くことにする。帽子をかぶって最後の仕上げをするが、帽子もぶかぶかで赤い髪が胸元に零れ落ちる。

どうにかまとめられないものかと苦闘するが、まとめ用のゴムさえ使ったことがない俺は背中流して諦めた。

鏡の前に立ち、やはりどうしようもないアンバランスさに笑ってしまっ。

しかし何だ、これで出かけるのか、と一抹の不安がよぎる。

まず、この部屋にいることを大家、及び住人に知られることは不味い。

天道司は今頃病院である。

連絡が行っているだろうが、両親がこっちに来る可能性もある。

鉢合わせすれば面倒なことになるし、今のこの俺の身を明かすものすらない。

そして誰かが訪ねてくる可能性が高いのだ。

植物状態で長期入院ともなれば、この部屋自体が引き払われる可能性もある。

もしそうなればいるところがなくなる。

大学に頼りになる奴もいるが、それは天道司が作り上げた人間関係である。

得体の知れない少女の言い分を真実と信じられる根拠がない。

何よりも植物状態で生きている俺が存在するという時点で信じがたいはずだ。

そこまで考えて、俺は色々と言っている事実につげー深いため息を吐き出していた。

そついや、海鳴神社に来いって言ってたな。

場所どこだっけ？

海鳴市のマップを広げて位置を確認する。

バイクなら近いんだが……

この体のサイズでは乗れるはずもない。

いや、それよりもだ。

俺がどこの病院に入れられたのかを確かめる必要があった。

電話帳を取り出して、病院を確認する。

天道司が入院しているかを聞き出すための台詞をシミュレートし

て、一軒一軒ずつ確認していく。

四件目でヒットした。

海鳴市中央総合病院。

そこに緊急入院していた。

いぶかしむ電話の向こう側を無視して電話を切る。

さて、どちらから先に行こうか……

慎重にドアから表を窺い、誰もいないのを確認して外に出る。

アパートの階段を下りると、駐車場で作業をしている大家さんの後姿が見えて、俺は足早にすぐ後ろを通り過ぎていた。

大家さんは気がついた様子もなく車をいじっていた。

アパートの出入り口に置いてある、自分のバイクを見てきちんとカバーがかかっているのを確認し、一安心してそのまま敷地を出た。何せ購入してまだ半年の司が大事にしているバイクだった。

今月はツーリングに行く予定だったが、その約束は果たせそうになかった。

そして駅に向かう。

どのみちどちらに行くにしても駅を素通りすることはできなかつた。

それにどうしても確認したいことがあった。

異様に体が軽い。

実際に体も縮んで背も低く体重も軽い、という意味ではなく、基礎的な身体能力が向上しているのが理解できた。

体の重さを感じさせないバランスの取れた肉体である。

とはいっても、今の俺にはだからどうした、程度のことであり、深く考えている余裕などなかった。

歩きながら手持ちの金のなさを認識して不安に駆られる。

キャッシュ・カードは司自身が財布に入れていて、引き落とすにはそれが必要だったからだ。

さしあたっては部屋に残してある、バイトで貯めたへそくりがあるものの、ツーリング用に貯めていた金であったので少し気が引けていたが、金がなければ何もできないとそれを持ち出していた。

客観的に見れば窃盗である。

しかし今はそんなことにこだわってはいられない。

今の俺の頭の中を占めるのは、あの事故の現場、俺が轢かれた駅前広場のことだった。

事故に遭う瞬間のことは、あの悲鳴にも似た急ブレーキの音があっても頭の中に思い出すことができた。

轢かれた後の記憶は、あの神様と会う時間のものしか残っていなかった。

だからどうしても疑ってしまうのだ。

本当に俺は車に轢かれて生死の縁をさ迷っているのだろうか？
確認するのも怖いが、何もしないでいるのはもっと怖かった。

自分の知らないところで自分が死んでしまう。

もしそうになったら、今の自分はいたい何者なのだろうか？

自然、足取りは速くなる。

駅が見えてくる。

駅前広場に入ると、植え込みのレンガの壁が一部崩壊した現場に

到着していた。

すでに野次馬や警官達の姿はなく、現場保存のために残された黄色いテープが張られているのみだった。

ガードレールも一部変形し、どす黒く変色した血がこびりついている。

ここで俺は……轢かれたのか……

アスファルトに残された血痕の跡、一際血の海であったそこは赤黒く染まったままだった。

俺の血が流れて、ずたぼろになった俺がそこに横たわっていたのだ。

気分が悪かった。

不意に寒気を感じて、体を抱きすくめ座り込んでいた。

気持ちが悪い。

誰が俺を轢いたのだ？

胸の内に芽生えた何かがドロドロと糸を引いて、それに飲み込まれそうだった。

しばらく経って、ようやく落ち着いてくる。

胸のざわめきを深呼吸をしてどうにかなだめると、血の気の通い始めた顔をピシヤリ、と軽く叩いた。

こんなところに座り込んで目立ってる場合ではない。

立ち上がるが、足取りが安定していなかった。

まるで酔ってしまったかのような、肉体と精神が切り離されたかのような乖離した感覚に包まれていた。

俺は病院行きのバス停のベンチに腰かけてバスを待った。

まず病院に行き、俺の存在を確認しなければならぬ。

時間に余裕があれば神社に行くつもりでいた。

いや、できれば今日中にアクセスしなければならなかった。

思考に沈む俺の前にバスが停車する。

ブロロ、とエンジン音を響かせてバスが動き出す。

真紅の髪を持つ少女が乗り込むと、病院行きのバスが走り出して
いた。

バスの中から眺める空の風景は灰色に変わっていた。

0 - 2 起きたら幼女だった…… (後書き)

病院>神社ルートで進めます。

0 - 3 病院 現実と俺

病院

俺が見上げた治療室の扉のその向こう側では手術が行われていた。

時刻：一六時二〇分

手術中のランプが点いたそれから目をそらす。

立ったまま、どうしたらいいのかもわからずに、控え室の前をうろろろしていた。

司が病院に到着してから三時間、合計してすでに六時間、手術を開始してからそれだけの時間が経過していた。

大丈夫だ、死にはしない。

気休めにもならない心の眩きだった。

無事に手術が終っても、植物人間が確定しているなど知りたくもない事実だった。

かなりの重体であったことは司も映像を通して見ていたが、どれほどのものかまでは確認できていなかった。

もし意識が戻ったとしても、五体満足に完治するという保証などどこにもないのだ。

リハビリというものがどれだけ苦しいのか、高校二年のときに足を骨折して入院したことがある司は思い知っていた。

あのときでさえ、不自由な足一本満足に動かすどころか、足とそれを動かかそうとする全身の神経の不一致に苦しんだのだ。

奪われたものは二度と元には戻らない。

事故というものは常に不条理で、信じられないタイミングで襲い

掛かってくる。

巻き込まれるのは本人だけではない。
家族全体が事故がもたらしたものと戦わねばならないのだ。

通路脇のソファに腰を下ろす。

通り過ぎた看護婦がお大事にと声をかけて頭を下げて通り過ぎる。
赤い髪の少女を手術中の患者の縁者だと思ったのだろう。

何時間もそこにいれば誰であってもそう判断することだろう。
時間の経過と共に焦燥感が司の表情を堅く、無表情なものへと変えていた。

時計はチクタクとただ時刻を刻んでいく。

寒い……

足元から冷えてくる感覚に司はもよおしてきて、恥ずかしいながらもトイレに駆け込んでいた。

一瞬迷ったが、中身はともかく、女の子の外見で男子トイレに入ることなどできない。

清潔なトイレの個室に籠ってお腹をさする。

やはり冷えていた。

半ば素足を晒しているし、革ジャン以外の暖かい衣類がないのが原因だろう。

しかし脱ぐのか……

司を戸惑わせたのは男と女の肉体上の異なる一部分についてである。

部位は同じなれど、立って済ませたりできない仕組みであることは理解していたから、ズボンを下ろして、極力見ないようにして便器に座り込む。

興味があるない以前に、それが自分の器官であるという点が非常にナイーブな問題を司に与えていたのである。

腹に込めていた力を解放すると、生理現象に則った排泄感覚が襲い、体をブルリと震わせて行為を終えていた。

下着は何も考えずにトランクスなどを履いてきてしまったのもよくなかったのかもしれない。

男のときはなんでもなかった行為に過ぎないのだが、肉体に合わせた服を着るのも体調管理の一環になりそうだった。そんなことを考えながら俺はトイレを出る。

周囲の雰囲気が一変していた。

妙に騒がしい。

緊急治療室の近くには家族のための控え室があり、声はそこから聞こえてきていた。

知った男の声と、ここにはいないはずの両親の声。

思わず革ジャンごと自分の腕を掴んでいた。

親父……お袋？

しばらく電話越しでしか訊いてこなかった肉親の声だ。

間違えようはずもない。

控え室の近くに寄って、半ば開け放した扉の中からは、俺が死角となる位置から中を覗き込んだ。

三人ほど人がいて、一番目だつて見えた背中俺のよく知る人物だった。

彼は俺の大学の先輩に当たる人ですでに卒業し、この海鳴にある企業に就職し、司も最近はよく相談に乗ってもらっていたし、個人

的な恋愛に関することまで相談できる信頼できる人だった。

仲居……先輩、とその名を呟く。

先輩がおそらく両親をここまで連れてきたのだろう。

その向こう側にお袋の顔がちらりと見えて、何か言ったのか、親父が笑った。

変わらない。

お袋は息子がこんなことになってるのに冗談が言えるのだ。

俺は両親が四〇手前になってから生まれた子どもだった。

二人は俺が海鳴の大学で一人暮らしすると宣言したときも、親父は頑張れ、と一言言って、体には気をつける、とかなり素っ気無かったが、一人息子が自立することを受け入れてくれた。

二人とももう六〇過ぎで孫がいても不思議ではない歳だ。

司がコウノトリとお嫁さん同時に連れてこないかねえ、とお袋は冗談交じりによく言っていた。

結婚とか子どもとか、まだ遊びたい盛りが強い俺には気が早いと思うことでそういうことから逃げてきたが、親父ももう歳だったから、最近では電話すると、親父もいつ戻る？ と訊いてくるようになった。

後数年、卒業して何年かは社会に出て勉強したいと逃げていた。

好きな人のこともあって、そういう現実から目をそむけ続けた。

すべてが言い訳だ。

離れているのを幸いにずっと言い訳をし続けてきて、また逃げるように今度は事故に遭った。

なんて好き勝手な息子だろうか。

「どうかしたのかい？ お嬢さん」

「え、いや……」

目の前に親父が立っていた。

白髪が混じった黒髪にセーターとスラックス姿で、スラリと様子見のいい姿勢で俺を見下ろしていたが、警戒心を抱かせない柔らかい味のある笑みを浮かべていた。

「その、すみません……」

「あれ、君は？」

お袋が廊下に佇む赤毛の少女に気がついて顔を向けていた。

同時に振り返った仲居先輩が俺を見て、いぶかしむように声をかけてくる。

それに答えずに、俺はくるりと親父に背を向けて駆け出していた。そのまま階段のある方へ行き、飛び降りるように駆け降りて行く。誰もすれ違わず、追ってくる様子はなかった。

病院を飛び出して、荒く乱れた息を吐き出していた。

熱の籠った白い息が肺から吐き出されて、周囲との温度差を明確に浮き彫りにする。

くそ……

俺はどうしたらいいんだ。

空はどんよりと曇り灰色の分厚い雲が重たげに漂っていた。

見上げた空から、ポツリポツリと雨粒が降ってきて、その一滴が冷たく頬を濡らしていた。

行こう、風邪引いちまう……

気がつくと、スニーカーをかたっぽ履いてないことに気がついた。

どうしても戻る気にはなれない。

俺はもうかたっぱのを脱いで手に持って歩き出していた。

冷たいアスファルトと冷たい雨に心まで冷えてしまいそうだった。
生きている証が欲しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3668y/>

俺が事故って起きたら紅の鉄槌少女になっていた【ネタ】

2011年11月10日07時14分発行